

TSUSHIMA 2050

TSUSHIMA 2050

0. 背景

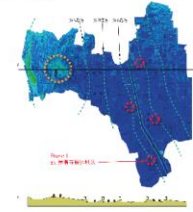
近年、自然と人間の両方の影響が深刻化している。気候変動は、自然環境と社会環境を脅かす深刻な課題となっており、その影響はますます深刻化している。気候変動への対応は、持続可能な社会を実現するための重要な課題の一つである。

TSUSHIMA 2050は、気候変動の影響を軽減し、持続可能な社会を実現するための取り組みの一環として、津島市において実施されている。この取り組みは、気候変動の影響を軽減し、持続可能な社会を実現するための重要な課題の一つである。

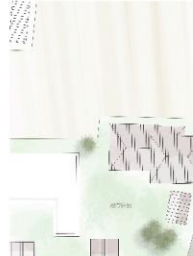
1. 危険管理



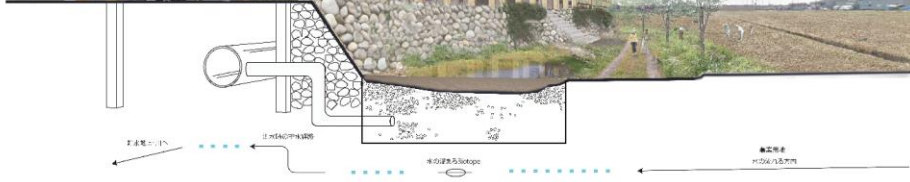
2. 堤防



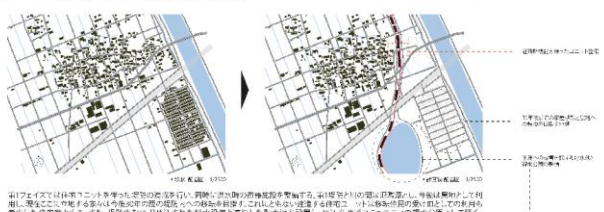
4. 住宅配置



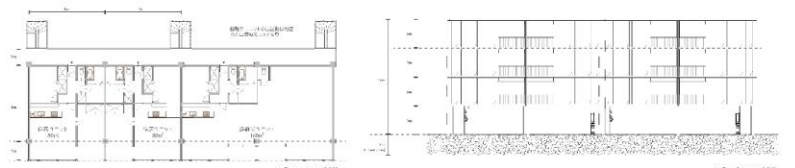
6. 住宅/堤防ユニット



3. 土地利用計画 (ex. 津島南部 東漸寺周辺)



5. 排水/貯水公園計画





津島市において、今後起こりうる洪水対策には住宅を洪水へ適用させるのみではなく、土地利用と危険管理を含めた包括的な計画が必要となる。また、洪水への対策は長期的な視野で臨まなければならない、経済的持続性も重要となる。そこで、河川の氾濫への対策を長期的視野で捉え、住宅整備、土地利用計画、洪水対策を一体的に行っていく『TSUSHIMA 2050』を提案する。

津島の洪水対策住宅モデルとして堤防とユニット化された建築を提案する。このユニットを線状につなげることで背後の既存住宅を保護する堤防の造成、土地利用計画の線引きを同時に行う。

堤防には津島の伝統的な水屋を模した意匠を用いる。堤防のみを設置する場合は排水パイプの上に1m程度土を盛る簡易的な造成のみとし、工事費を抑えて経済的持続性を高める。堤防の前には排水・貯水機能を持つ小川やビオトープ等の親水空間を設け、コミュニティ道路、広場を整備することで計画の公共性を担保する。

住宅ユニット1Fはピロティとし、用具置き、レクリエーションスペースとすることで大洪水時の家屋への浸水を防ぐ。また、周辺コミュニティの規模に応じて、数ユニットに1つ災害避難所機能を設けることで災害に強い住宅施設とする。堤防内のパイプと繋がった住宅のインフラコアには小規模の浄水施設を設置し、中水の利用と排水削減により自然環境への負荷を軽減する。(橋本尚一郎)

【審査委員講評】

難波和彦審査委員長

堤防とその上に建てられた線状集合住宅を、既存市街と農地や親水池との境界線上に配置した提案である。これからの高齢化と人口減少という条件を逆手に取った、新しいコミュニティの形態とコンパクトシティ的な集住体の提案を期待したが、応募者にはそこまで突っ込んだ問題意識がなかった点が悔やまれる。

朝岡市郎審査委員

排水/貯水(公園)計画が提案されている。津島の地域の特性を活かした提案である。この公園が普段はコミュニティの場、災害時には排水施設として活用でき自然との共生も提案されている。共同住宅での提案は希少であった。

生田京子審査委員

集合住宅の規模を活用して、土木的なインフラ整備をセットに治水を行おうとする計画でした。治水整備に対する更なる詳細な説明や実際の生活像の描写が期待されました。

川崎浩司審査委員

川沿いに高台を設け、ピロティ形式の集合住宅を造成することにより、中長期的な土地

利用に配慮した 2050 年の津島市のまち空間を提案しているところに独自性がある。

清水裕之審査委員

集落のエッジとして、線上の空間を土盛りし、その上に集合住宅を建設し、田園側にはビオトープを建設するという提案は非常に面白い。残念なのは、二次審査の段階で、集合住宅の提案を発展させず、人工地盤の上の戸建て住宅提案になってしまったのは、なんとも残念であった。また、無限にのびる線状計画には違和感がある。むしろ、大きく既存集落を囲む現代輪中のような形で計画をしたほうが現実的ではなかったか。

日比一昭審査委員

海拔ゼロメートル地帯一帯の洪水時の提案として、集合住宅を建設し、地区の避難場所を併設することは、一つの提案と考えられる。さらに、第2、第3の堤防を準備し、文化的価値の高いエリアを守ろうとしている点も興味深い。しかしながら、1階部分のピロティ部分の機能提案や高齢者への配慮などの具体策が弱いと感じた。